

海外考古学事情

ブルガリア随想録

伊 丹 早 苗

はじめに

1999年の世界10大ニュースのトップ記事だったコソボ紛争。バルカン半島は、かつて「火薬庫」と称されたが、この言葉はまだ死語ではないことが、この民族紛争でも明らかになった。私はちょうどその時期、同じバルカン諸国の1つ、ブルガリアにいた。ブルガリアとて今は静かなものの「火種」がないとはいえない。周囲を5カ国が取り巻き、そのひとつユーゴスラビアでは前述の紛争が



あったし、別の隣国マケドニアは、近代にブルガリアから分離した国のため、その存在を否定するブルガリア人も多い。民族、国、土地はどのように結びつくのかという、永遠に答えの出ないメビウスの輪のような問題を争うたびに悲劇が生まれる。縄文時代から現代まで日本史の概念でひとくくりすることに、自他ともに何ら躊躇しない我々日本人には、理解を超えた感情である。

ブルガリアといえばヨーグルト、というように、ブルガリアにはどこかのどかな印象を持たれるかもしれないが、実際にはまったく正反対の厳しい歴史がある。日本ではあまり知られていないそのブルガリアの一部を、私自身のブルガリアでの活動と併せて紹介したい。

1. ブルガリア今昔

バルカン半島は、ヨーロッパとアジアの狭間に位置する。そこは双方の民族が行き交う回廊でもあり、また周囲を囲んだ大国の飛沫が流れ込む谷間のような場所でもあった。ここにはローマやオスマン朝の様な壮大な文明は興らなかった代わりに、当地に割拠した数多くの民族と、それに伴う戦いの硝煙の痕跡が残されている。

世界最古の黄金製品が、ブルガリアで発見されていることをご存知だろうか。これらは、多数の墓に副葬品として埋葬されていた。その遺跡は黒海沿岸の町ヴァルナ近郊にあり、紀元前4000年前後に比定されている。これらは1982年に、「ブルガリアの遺宝—世界最古の黄金文明展」として日本でも公開された。

「金」ということでは、次の時代のトラキアも注目に値する。トラキアは、紀元前2000年頃～紀元前4世紀、バルカン半島全体を席卷した遊牧騎馬民族である。カザンラックやスベシタリの墳墓（いずれもユネスコの世界遺産に指定）が有名だが、意匠を凝らした金銀製品の見事さは、他のどんな文明にも勝るとも劣らない。それらは、トラキアの絶大な権力と富を象徴している。トラキアは、マケドニア王国のフィリップ2世（アレクサンダー大王の父）によって滅ぼされた。

その後ケルトやローマなど数々の民族や国がこの地に割拠したが、7世紀にブルガリア王国が成立し、時代は大きく動いた。このブルガリア王国は、東のビザンツに対抗するために、「ブルガリア」の名の起源となったアジア出身の遊牧民族ブルガール族と、農耕民族スラブ人の連合国家だった。ブルガリア王国時代も、常に周囲に異民族が侵入し続け、数代にわたる王によって平和、統一を維持したことはまれで、王の死後、分裂することが多かった。即ち、全史を通して統一と分裂の反復の中に興亡した国だった。ブルガリア王国は、異なる2つの民族から成っていたが、自らの国を守るため、団結を強めるとともに融和された社会を形成し、現在につながる「ブルガリア人」としての統一したアイデンティティを確立していった。そういう意味で中世という時代は、現ブルガリアの故郷のような存在といえる。そして14世紀末、オスマン朝の侵略を受け、ブルガリア人にとって最も屈辱の時代である500年ものオスマン朝支配の時代に移る。

ブルガリア人のアイデンティティ喪失への危機感から独立運動が高まった19世紀、ようやくロシアの支援でオスマン朝からの独立を果たしたが、ブルガリアの苦悩はまだ続く。第1次、第2次バルカン戦争を戦い、間もなく世界は2つの大戦を迎える。だがブルガリアはどちらの大戦でも敗戦側で、近代においてまたも領土を削られた。そして、共産主義の洗礼を受けることになる。

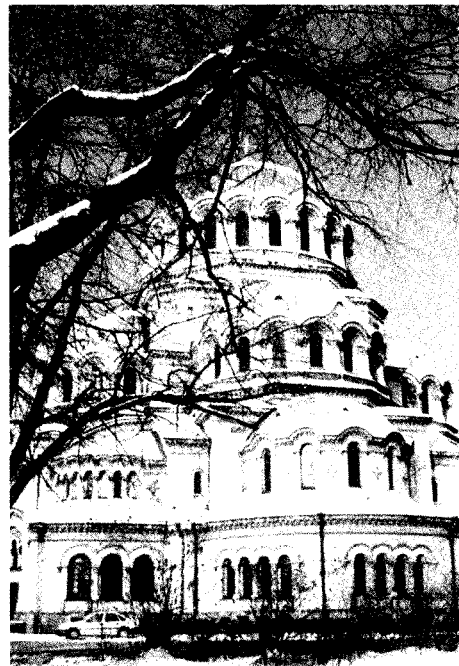
現在も、ブルガリアは共産主義から民主主義への移行期にあつて、社会体制の建て直しと経済状況の悪化に苦しんでいる。この国に穏やかな平和が訪れるのは、一体いつのことなのだろうか。しかしながら、現在のブルガリアは、もはやどこの国にも隷属せず、またどこの国に侵略される怖れもなく、はじめてひとり立つことができる。そういう意味では、今ようやく真の意味での「自由」を得たといえる。そして一方では「自由」ということの背負う厳しさに、初めて直面しているともいえるだろう。

2. ブルガリア人のアイデンティティ

このように、そこに展開された歴史の中で、ブルガリア人が「ブルガリア史」と認識するのは、中世のブルガリア王国以降である。それ以前の歴史は、例え同じ土地に興った歴史であろうと、彼らにとっては「外国史」も同様である。「ブルガリア」という概念は、あくまで「ブルガリア人」とセットにならなくてはならない。だがブルガリア人という民族はなく、「ブルガリア王国に住んでいたブルガール人とスラブ人およびその子孫」のことを指す。スラブ人は他の地域にも住んでいたが、ブルガリア王国に住んでいなければブルガリア人ではない。隣のユーゴスラビアも同じスラブ人の国だが（ユーゴスラビアというのは、スラブ語で「南スラブ」を意味する）、中世にはセルビア王国が興っていたため、そこに住む人々のことはセルビア人と呼ぶ。逆にいえば「ブルガリア人」たるためには「ブルガリア」という国が必要なのである。「国（土地）」は、アイデンティティを実現、成立させるための「場」といえよう。

ところが、この「国（土地）」の線は、長い歴史の間に数限りなく変化している。どこで線引きしても、その線の内側にも外側にも、納得しない人々がいる。万人に納得できる国境線などない。それは誰もが感じていることだが、その幾重にも重なった軌跡の数だけ、そこに住む人々に残される傷痕は深くなる。

現代のブルガリアには、はるか古代トラキアの風習と考えられる祭りが残っているし、彼らの宗教（ブルガリア正教）は、中世、隣国ビザンツに屈した結果、屈辱的に受容したキリスト教である。そして500年もの間隷属させられたトルコ人をいまだ敵視する。その長い苦痛から救ったのはロシアだった。ロシアは自国の利害のために戦い、結果的にブルガリアを救ったにすぎないのだが（1877年の露土戦争）、国内には多くの場所に、ブルガリアを救った英雄ロシア王のモニュメントがあるし、オスマン朝との戦争記念碑や記念日も多い。ブルガリア語の中にはロシア語、トルコ語はじめ西欧諸国の言語などの外来語が数多く存在するし、ロシア語で使うキリル文字は、ブルガリアが起源である。共産主義時代には、



アレクサンダル・ネフスキー寺院(ソフィア)
露土戦争(1877)で戦死したロシア兵慰霊のため
建立された。

「レーニンよりもレーニン主義」といわれるような徹底した共産主義を貫いた。そして国内の道路（通り）という道路に付けられた名前には、古代から現代までの人名や国名などがオンパレードする。しかもその道路幅の大小は、歴史上あるいは社会上の重要度に比例することが多い。

人々はこうした歴史の痕跡と隣り合わせに、日常生活を営んでいる。歴史はいまだ人々の中に生々しく生きているし、人々はその歴史を大切にしている。もし、単なる旅行でこの国を訪れていたなら、気がつかなかったことも多かっただろう。また私が、現地の人々同様の生活をしながら支援活動をする、青年海外協力隊の隊員であったことや、歴史博物館に勤務していたことで、そうしたことに接する機会が人一倍多かったのかもしれない。日本とはあらゆる概念が異なるこの国で、隊員活動だけではなく、我々日本人と異なる価値観を知ることは、歴史に携わる仕事をしてきた自分にとって、非常に興味深い体験だった。

3. ブルガリアの青年海外協力隊（以下JOCVと略す）

私は、平成9年7月から2年間、JOCVの考古学隊員として、ブルガリアに派遣された。配属先は、ブルガリア南東部に位置する人口約9万のヤンボル市にある歴史博物館だった。この博物館には、私のほかに3人の隊員（システム・エンジニア以下SEと略す一、測量、写真）が派遣されていた。JOCVの一般的なイメージは「赤道直下（熱帯）・井戸掘り・農業」などであろうが、実際は、ブルガリアの冬はマイナス10～20度に下がり、寒さのなか凍えていたし、井戸どころか上下水道も電気も完備され、蛇口をひねればお湯も出た。博物館での事業は、コンピューターシステムの整備、マルチメディア展示、発掘ではトータルステーションの導入など、ハイテク機材の供与と技術支援であった。

JOCVでは、ブルガリアの他ルーマニア、ハンガリー、ポーランドの東欧諸国へ隊員を派遣している。しかしながらそれらの国は、途上国の指標のひとつである識字率は欧米並みで、教育水準は高い。ただし膨大な債務の返済と産業不振のため経済活動が滞っており、ブルガリアの1人あたりのGNPは1,230USD（1998年）（注1）で、博物館職員の月給は40歳で約70USDである。生活様式は欧米並み、収入は途上国並みである。従ってブルガリアはじめ東欧での支援や生活は、一般的な途上国に対するものとは異なる形態を呈する。前述のイメージのような体験を期待しJOCVに応募したのに、東欧に派遣され、とまどう隊員も少なくない。

ところでブルガリアが最も必要とするものは、第1に事業のための資金、第2に諸システム改善のためのハイテクノロジーである。協力隊の活動も、スポーツや日本語教師など隊員そのものの存在に意義がある職種を除くと、ほとんどが資金援助、それもコンピュー

ター機材の購入に終始する傾向が強い。JOCVは技術移転と考えられているが、実は資金援助も重要な役割を担っている。

ブルガリアのJOCVは、旧体制崩壊後の1993年に最初の隊員が派遣されたので、歴史はまだ浅い。隊員の派遣先と職種（括弧内）は、学校（日本語、美術、SE、CG等）、スポーツ組織（柔道、剣道、野球）、研究施設（考古学、SE、測量、写真、水質検査）で、現隊員数は2000年1月現在で53名（のべ132名）である。そしてその現隊員中12名が博物館への派遣である。その高い割合を見てもおわかりかと思うが、ブルガリアにおいて、博物館支援は重要な位置を占めており、世界中のJOCVの中でも特異な活動をしている。

ブルガリアの博物館へ最初の隊員が派遣されたのは、1995年の考古学隊員だった。その隊員の活動は、他のJOCV派遣諸国同様、発掘調査への支援で、測量（平板）が中心だった。現在も同様の支援は行っているが、それに加え1997年から開始された、コンピューターシステムの整備がブルガリア特異の支援事業となっている。それはコンピューターを設置し、業務の効率を図ると共に、データベースを作成し、資料保存の電子化を進めるというものである。特にデータベース事業は、各博物館の関心を集め、現在博物館支援の主軸になっている。その他にも、展示関係、保存科学など多様な業務での協力が行われている。現在（2000年1月）隊員の派遣博物館数は8で、隊員の職種と隊員数は、考古学4名、SE4名、写真2名、測量1名、美術（業務内容は考古学）1名である。さらに、現在隊員要請中なのは2000年1月現在で、3博物館3名（考古学1、SE2）で、まだ増加の傾向にある。

かつて博物館へ派遣された隊員の職種は、考古学だけであったが（他の諸外国ではいまだ考古学隊員だけである）、多職種の隊員の派遣は、世界的な傾向ともなっている多様化するこれからの博物館事業を象徴するかのようであり、それはまたブルガリアの状況が、それだけのシステムを受容するにたる近代社会として熟しつつあることをも意味する。

ブルガリアはな先進国を隣人に持つがゆえに、その大きな格差を目のあたりにせざるをえなく、歯がゆい思いをしながらも、それに追いつこうと必死に変革を進めている。考古学においても同様である。そこで次に、私が実際に関わった発掘調査を元に、ブルガリアの考古学事情について紹介する。

（注1） http://www.worldbank.or.jp/O6group/RC_flame.htm

4. 発掘調査の支援

ブルガリアでの発掘調査には、学術発掘と開発に伴う緊急発掘がある。事業実施区域に遺跡がある場合は、日本同様発掘調査が義務づけられているからである。調査主体となる

のは、その遺跡の管理を担当する地方博物館である。ただし、重要な遺跡の場合は、ブルガリア科学アカデミー（文化庁のような機関）の中にある考古学研究所（ブルガリア考古学界のトップに相当する組織）が担当、もしくは現地の博物館と共同調査する。すべての発掘は、年末までにその調査概要が考古学研究所へ提出されるが、その後報告書が刊行されることは非常にまれである。

JOCVの発掘調査への支援は、測量中心の支援から開始され、現在も基本的にはその指針を変更してはいないが、これまでは平板などの簡易的な測量だったのに比べ、現在はトータルステーションを使用したものに変化してきている。その大きな理由は、支援をする調査遺跡の規模が大きくなっていること、また遺跡の調査だけに終わらず、その測量データを副次的に利用することを想定した事業、例えばコンピュータ・グラフィック（以下CGと略す）による復元などが検討されはじめているからである。

私たちが担当したカピレ遺跡は、主に紀元前1000年～BC 4Cのトラキアの都市遺跡である。広さは小山を含み約600,000㎡ある。遺跡全体が国指定の史跡になっており、1972年から調査されている。遺跡は垂直方向にも広がり、地下4～6mに達する。下層からトラキア、一部



カピレ遺跡

ローマ、ビザンツ、中世（～14C）である。調査済みの遺構は一部復元・保存され、部分的に遊歩道が設けられ、遺跡全体を公園整備している。遺跡に隣接して、出土品を収めた展示室や発掘用宿舎があり、24時間管理者が常駐している。発掘は、夏季の1～数ヶ月、ソフィア大学と共同調査され、考古学専攻の学生の実習地ともなっている。

ところでこれらの学生が、実際に発掘を経験するのは、夏期休暇中だけである。実習の仕方は、例えば1年で先史遺跡を掘ったなら、2年で古代遺跡、というように、学年や担当教官によって実習する遺跡の年代を違えているが、日本のように授業の合間に現場へ出る、ということはないので、机上学習が中心となる。就職しても、近年予算不足のため発掘日数は少なく、従って実績を積みにくい状況にあるので、研究者としての成長が遅い。私が共に調査した博物館の発掘担当者も、27歳という年齢にもかかわらず、計画性が甘く、遺構が多少重複しているだけで、とたんにお手上げ状態で、実力は学生とあまり大差なかった。私の現場での支援は、こうした場面でのアドバイスが主なものだった。

さて、予算不足によりあらゆる学術活動が滞る中、JOCVの支援に、期待がかかったのも無理はない。発掘調査では、私の他、測量、写真の3人の隊員が活動した。私は発掘の方法論的な面と掘り上げ中の写真撮影、測量隊員は光波を使った測量、発掘終了後に写真隊員が、全体の遺構を撮影するというものだった。

現場では、まず測量隊員がJOCVから供与された光波を使用してカピレ遺跡全体の再測量を行った。それは、古い測量図はあったが不正確なので取り直しが必要だったことと、将来的にはCGによって立体復元した映像を制作するために、データが必要だったためである。遺跡全体の測量がなされる一方で、新たな調査区域では、より精密に測量され、エレベーション、セクションなどの図面も作成された。セクション図の概念は新しいものらしく、古い報告書ではまったく見受けられなかった。元々測量の仕方は大雑把である。例えば、コインは年代決定につながる重要遺物なので、金属探知器を使ってまで丁寧に探すのに、見つけるとさっさと取り上げてしまう。出土地点を図面に落とすよう何度も（しつこく）提言（叱咤）した結果、最後にはようやく言う通りにするようになった。しかしその測り方は、せっかく光波があるにもかかわらず、レベルも入れずに定規で適当に目測していた。測量隊員と私は2人掛かりで、ブルガリア人担当者と根競べしていたようなものである。



カピレの宿舍前で

(左・ブルガリア人パートナー、中・自分、右・測量隊員)

写真については、新たなカメラ機材やフィルムおよび現像経費を支援した。隊員派遣以前は予算不足で、1件の発掘で撮影した写真は、調査終了後の写真を中心にわずか10~20枚程度であった。しかも写真撮影できる職員がいなかったため、外注していた。

ここでブルガリアの仕事の分担について一言触れておきたい。どの業務においても分業主義が徹底しており、トータルコーディネイトという概念はないに等しい。発掘においても、現場担当者は「掘る」だけである。測量は、美術家といわれる絵描きが、写真は写真家が担当する。従って、考古学専攻の学生といえど、遺物の復元、遺構・遺物の測量や写真撮影を学ぶことはないのである。遺物復元は修復専門の学校があるし、遺物の実測は美術学校、遺構の測量は測量学校、写真は写真学校で学ぶ。

このような分業制は、業務遂行の上で非常に非効率である。例えば、調査途中で記録を取る場合、そのたび測量技術者や写真家に外注することになる。だが実際そんな面倒なことはしないので、結局は図面や写真を取るのは調査終了後だけ、ということになる。

ところでJOCVの規則では、隊員が機材を購入する場合、その隊員には必ず現地の職員がパートナーとして付き、その操作を教えなくてはならないことになっている。これは、きちんと技術移転しなければ、隊員撤退後、それらの機材が使用されなくなるおそれがあるためである。

さてヤンボルの場合、現場担当のブルガリア人は1人であった。彼は私のパートナーであったが、測量や写真各隊員のパートナーでもあった。彼は、うんぬんかんぬんと私が掘り方について講釈をたれるのに耳を1/3傾け、測量隊員が光波の操作の仕方を教えるのに1/3、さらに写真隊員がカメラについて教えることに1/3、耳を傾けなければならなかった。本来ならば、掘ってさえいればよいのに、JOCVと関わったがために、彼は他に2つもよけいな業務に携わらざるをえなくなった。彼にそういうとまどいがあったかどうかわからないが、実状を理解したのか、あるいは隊員の熱心（強引）さに根負けしたのか、とりあえず（仕方なく）努力はしている。写真については、日本と異なり、まだ一般にカメラが普及していない。コンパクトカメラさえ所持したことのないブルガリア人に、一眼レフを使いこなすことはすぐには無理なので、まずコンパクトカメラを購入し、それから覚えてもらうことにした。現在も次の隊員によって指導が続いている。遺跡のCG復元には、まだまだ遠いが、今まで眠っていたようなブルガリア人が、JOCVの参画によってハイテク機材が導入され、さまざまな事業の可能性が見えてくると、がぜん意欲的になる。こうした事業を継続させることは、人間を変えることにもなると感じた。



JOCVから供与された光波

ヤンボルでのこのような測量に啓発され、ローマ時代の城壁がブルガリア一良好に現存する町の博物館でも、古代の町の復元という事業が開始され、トータルステーションを使用して、測量隊員が活動するようになった。

先史時代を除き壁や床が煉瓦や石でできているブルガリアの遺跡は、日本のような土壌の色の相違を見極めるような精査はあまり必要ないので、つるはしでがが掘る。というよりも、雨量が少ない地域なので、そうでもしなければ掘れないほど、土は乾燥して固い。また遺構の年代は、カビレ遺跡の場合、コインによって判断されるので、小さな誤差

で比定できる。そしてコインなどの出土品のクリーニングや修復技術の高さは、日本とそれほど変わらない。発掘技術も、私のパートナーは経験不足だったが、ベテランの考古学者の現場は、精密である。ブルガリアの発掘調査に参加して感じたことは、日本の技術的支援は、決して意味の無い事ではないが、それほどの必然性はないように思えた。むしろ予算がないので購入できない測量や写真機材の供与とそれに関する技術指導において、JOCVの支援は有効と考えた。現在ヤンボルの博物館では、私たちに続いて2代目の隊員が活動中である。

5. おわりに - 2年間を振り返って -

旧体制下のブルガリアは、外国人との直接の接触が禁止される等、閉鎖された社会だったが、新体制への移行に伴い、NATOとEU加盟を悲願とし、近代（西洋）化を急いでいる。そういう中で、いち早く時代を見極め、新しいものや西洋型の思考方法を取り入れようとしている人々と、いつまでも昔の習慣を脱ぎ捨てられないでいる人々との2極分化が進んでいる。前者は、まだ少数派ながら、外への窓を大きく開き、柔軟な先進気質を持っており、中には日本人並の仕事人間も多いが、後者は窓を閉ざし、何に対しても消極的だったり、勤務時間の多くをお茶とおしゃべりに費やしていたりする。

またこれまでのブルガリア方式の分業制は、上下関係にも通じ、決裁権のすべては、例えば博物館の場合、館長にしかない。いわゆる中間管理職がない。職員には考える権利も決める権利もほとんどないので、言われたことだけしかしない人間は多いし、それ以外に関心を持たない人間が多いのも仕方がない。このような状況では、人材も育ちにくいし、非効率的で、足踏み状態を助長する。しかしながら、こうした社会システムや習慣の背景には、前述した歴史が大きく控えていることもあって、簡単には変わらないであろうし、外国人には踏み込んでいけない性質のものである。これらはJOCV活動においても障害になることが多々あり、隊員は日本式思考法を捨てられないと、非常に苦勞する。

だが、このような状況の中で、異なる価値観を持ち、異なる社会から来た我々隊員の存在は、固定化したブルガリア人の思考回路を、多少なりとも組み解く上で関与しているような気がする。私たちが「西洋人」でないことが幸いしている側面もある。お隣の「西洋」は、彼らにとって一種ライバルみたいな感があり、素直に従えないが、日本は遠い国で利害関係もこれと違ってないので、逆に耳を傾けやすい、という傾向があるようだ。（とにかくブルガリア人の日本に寄せる関心は大きい。日本はブルガリアを殆ど見向きもしないので、その片思いに、時々気の毒になるほどだ。）もし、そうだとしたら、それはブルガリアに対する技術や資金の援助よりも効果的な協力と言えはしないだろうか。事業成果を大き

く左右するのは、資金や機材ではなく、それを使う人間次第だからである。国によっては、民俗や宗教の慣習が強く、外国人の影響でそのコミュニティを崩してしまう恐れがある場合もあるが、幸いブルガリアはその心配がないので、隊員は自分の考えを躊躇なしに述べることができる。逆に黙っていると、何もわからない、何も考えていない、ととられるおそれがある。私のブルガリアでの2年間、技術支援ということよりも、日本の博物館では、あるいは発掘調査では、どうしているのか、ということをお話する機会あるごとに話し、また日本の文化紹介に努めてきた。ブルガリア人は常々関心を持って、聞いてくれていたようである。そしてそういう機会や彼らの反応は、私自身の意識改革にも一役買っていた。こうした個人レベルの交流は、決して一方通行ということはない。2年間、一緒に勤務し、あれこれ話し合った同僚たちは、今大切な友人となっている。

背負う国や民族が異なっても、向き合えば同じ人間である。国際協力だろうと国際交流だろうと、根本は人間が向き合い、手を取り合わなければ成立しない。「国際一」はそのまま「人間一」と置きかえるだけで良い。コスモポリタン化する現代社会において、開かれた社会を目指すブルガリアの問題は、日本にとっても決して他人事ではない。古代から日本列島は日本であったということの付けが、今払わされようとしている。外に対して構えることなく、互いの異なる個性を尊重し、どんな相手とでも自然に向き合えるようになれば、仰々しく「国際一」と銘打つことはなくなっていくのかもしれない。